

特別展

大原家に残る書簡の数々

特別展期間 2021年10月5日(火)～10月17日(日)

展示書簡

中倉(二)

内中倉

大原孝四郎宛大原恵以書簡 明治39年(1906)

大原總一郎宛大原孫三郎・壽恵子書簡 大正15年(1926)

倉敷村年寄大原幸三郎宛用状 慶応3年(1867)

大原總一郎宛川村多実二葉書 昭和24年(1949)

大原孫三郎宛犬養毅書簡 大正5年(1916)

大原總一郎宛桐原葆見書簡 昭和24年(1949)

大原孫三郎宛暉峻義等書簡 大正8年(1919)

大原總一郎宛大山康晴書簡 昭和27年(1952)

大原孫三郎宛児島虎次郎絵葉書 大正元年(1912)

大原總一郎宛文部大臣電報 昭和27年(1952)

大原孫三郎宛大原眞佐子書簡 昭和9年(1934)

大原總一郎宛大原總一郎書簡 昭和28年(1953)

大原孫三郎宛日本民芸館書簡 昭和11年(1936)

大原總一郎宛大原總一郎書簡 昭和31年(1956)

大原孫三郎宛三橋玉見封緘葉書 昭和11年(1936)

大原孫三郎葬儀通知 昭和18年(1943)

大原孫三郎宛大原孫三郎書簡 昭和17年(1942)

大原總一郎宛棟方志功書簡 昭和21年(1946)

背景：大原孫三郎宛犬養毅書簡(部分)



孝四郎・孫三郎宛の数々の書簡 中倉(二)

今回展示している最も古い書簡は、幕末の孝四郎宛のもの。村の年寄役を勤めていた孝四郎(史料中では「幸三郎」)に他村の庄屋が送ってきた人別送り手形(送籍状)作成に関する通知である。孝四郎宛の書簡としては、旅先の孝四郎を案じつつ、近況を報告している妻恵いからの書簡を展示している。孫三郎宛の書簡としては、犬養毅(木堂)からの前日の衆議院議員補欠選挙好結果に対する礼状や後に倉敷労働科学研究所所長となる暉峻義等が大原社会問題研究所へ入所し、倉敷紡績の工場での実験的研究開始の準備に当たっている書簡などを展示している。

江戸時代の書簡は勿論、明治・大正期の書簡でも、和紙に墨で記されたものが多い。昭和に入ると、息子總一郎の妻眞佐子からの書簡のように、便箋にペン書きの書簡や、日本民芸館の開館を通知した印刷物なども見られる。また、比較的珍しい形態である封緘葉書として、三橋玉見から送られたものを展示している。



大原孫三郎宛児島虎次郎絵葉書

洋画家児島虎次郎から孫三郎に宛てた書簡や葉書が大量に保管されている。現在確認できている史料は、虎次郎が大原家の貸資生となり、東京美術学校に通っていた明治35(1902)年から大正末期にかけて、250点を超えている。孫三郎の援助や依頼を受けて、前後3回渡欧した虎次郎であるが、今回展示している絵葉書は、第1回渡欧時の1912年5月12日から26日にかけてイタリア各地を旅行した際に、それぞれの街から送られてきたものである。

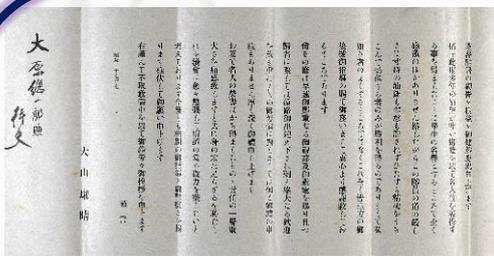
第1回渡欧時には、上記のイタリア旅行の他に、パリのオペラ座やブリュッセルでの万国博覧会などなど、ヨーロッパ各地の絵葉書が送られてきた。同様に、第2回渡欧時にも各地からの絵葉書が送られてきている。絵画購入を主眼とした第3回渡欧時は、絵葉書も見られるが、画家について、また、作品の価格など、絵画購入過程に関する詳細な報告が書簡にてなされている。例えば、ロダンの彫刻作品購入に際しては、作品A・B・Cの写真を同封し、それぞれの価格と評価を記し、どの作品を購入するべきか、判断の上での送金を求めている。



總一郎宛の数々の書簡 内中倉

總一郎へ宛てた、父孫三郎・母壽恵子からの書簡は、土間にて朗読展示している。今回新たに、第六高等学校の試験を明後日に控え、岡山市の長塩家に下宿している總一郎に宛てた両親からの激励の書簡を展示している。母壽恵子は、毎朝祈禱をして応援していることを伝え、父孫三郎は、簡潔に短文にて期待を表明している。

鳥の絵が描かれている葉書は、岡山県出身の鳥類学者で總一郎の鳥の師匠とも言える川村多実二からの中元の果物恵みに対する礼状である。労働科学研究所桐原葆見からの書簡は、内部の変化や外部の問題を報告することを告げるものである。



大原總一郎宛大山康晴書簡

倉敷を代表する偉人の一人として、将棋棋士の大山康晴十五世名人を挙げることに異論はなかろう。通算勝利数やタイトル獲得数など、大山名人の偉大な業績は、近くの大山名人記念館(倉敷市中央1-18-1)で御確認いただくとして、總一郎と大山名人の関係は非常に濃密なものであった。

昭和23(1948)年、名人戦初挑戦を決めた大山康晴へ、直接面識のない總一郎が激励文(大山名人記念館蔵)を送るところから、二人の交流が始まる。昭和25年に有隣荘で初対面し、昭和28年正月2日、初めて指導対局3番を両駒(飛車角行)落ちで行った。また、タイトル戦の自戦記を聞くこともあった。

今回展示している書簡は、昭和27(1952)年に初めて名人位を獲得した際に作成された礼状である。多年の宿望が叶ったことを喜びつつ、今後の更なる精進を誓っている。実際、初獲得以降、名人戦を五連覇して永世名人の資格を得ている。

總一郎との交流は、晩年まで続き、總一郎逝去前年の昭和42年には、軽井沢へ大山名人と弟子の有吉八段を招待し、将棋の指導を受けた。また、駒箱の蓋裏に「玄妙 名人大山康晴」と揮毫された、宮松影水作の将棋駒が大原家に残されている。更に、總一郎の蔵書には、見返しに「謹呈 大原社長 名人 大山康晴」などと署名のある大山名人の著書が複数含まれている。

總一郎逝去の翌年、昭和44(1969)年には、将棋界初の名人戦における師弟対決(大山名人对有吉八段)の第2局が、有隣荘において行われた。



大山康晴名人揮毫将棋駒